



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	礼文島におけるオホーツク文化の土器製作からみた社会集団の境界
Author(s)	劉, ビンウン
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第17041号
Issue Date	2026-06-30
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k17041
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/100094
Type	doctoral thesis
File Information	Liou_BingWun_review.pdf, 審査の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）

氏名： 劉 ビンウン

主査 教授 加 藤 博 文
審査委員 副査 准教授 蓑 島 栄 紀
副査 教授 吉 開 将 人

学位論文題名

礼文島におけるオホーツク文化の土器製作からみた社会集団の境界

当該研究領域における本論文の研究成果

オホーツク文化は、樺太（サハリン）から北海道北部の沿岸地域を中心に、5世紀から11世紀まで展開された海洋狩猟・漁撈民の文化である。このオホーツク文化については、生業経済活動の特性と大陸文化の強い影響が指摘され、北東アジアの社会集団が中世段階に日本列島北部へ到来した結果、成立した文化であるという見解が提唱されてきた（駒井 1969、菊池 2009 など）。一方で、オホーツク文化は、土器型式を基準に初期・前期・中期・後期・終末期の5つの段階に区分され、十和田式土器、刻文式土器、摩擦式浮文土器、沈線文式土器、貼付浮文式土器、トビニタイ式土器、元地式土器が設定されている（大井編 1982 など）。近年では、土器型式と編年の再構築（熊木 2018）や、銚頭を中心とした骨角製品の検討（高橋 2008）から、単なる外来文化ではなく、先行する在地の先史文化からの系統性を指摘する見解も出されている。オホーツク文化の系統性をめぐる問題は、古人骨に基づく古代DNAの分析結果からも同様の見解が示されている（Sato et al. 2025 など）。

本研究は、自ら調査に参加し、整理分析に関わった礼文島浜中2遺跡と香深井1遺跡のオホーツク文化期の出土資料を基礎として、土器の製作技術を原材料調達、成形段階、調整段階、装飾段階、焼成段階ごとに検討し、技術論の観点から土器製作技術の復元を行なったものである。分析結果の検討では、動作連鎖（Leroi-Gourhan 1964）と実践理論（Bourdieu 1972）を基に提唱された技術様式論（Lechtman 1977）や技術選択理論（Lemonnier 1993）を発展させ、実践されている土器製作技術と社会集団の関係性を検討する研究（Stark et al. 2000、Roux 2015）を参照して自らの方法論を設定している。また分析方法の検討と合わせて、オホーツク文化の土器研究の研究史を整理し、オホーツク文化独自の土器型式が認識される過程を明らかにした。特にオホーツク文化の土器型式研究の基礎となってきた大井晴男（大井 1982）と熊木俊朗（熊木 2018）による型式学的検討の成果と課題については、それぞれ詳細に検討を加えている。上記の学史的検討に加えて、台湾の原住民族の土器製作に関する民族誌資料を、旧日本統治期の調査（鳥居 1897、伊能 1897、鹿野 1941 など）や戦後の調査（宗 1957、石 1960、郭 2008 など）を参照して、土器製作過程で技術選択が行われる要因についても検証している。

土器の原材料採集地を特定するための胎土分析では、自ら遺跡周辺の原材料を採取し、実験考古学的手法を併用して分析結果との比較検証に努めている。分析の結果として、島北部の浜中2遺跡におけるオホーツク文化期を通じた土器製作技術と、島東海岸中部の香深井遺跡群での土器製作技術に各型式を超えた土器製作技術に反映された技術伝統が存在することを明らかにしている。また胎土に含まれる砂の粒径や分量によって調整技術を使い分けることや、製作される土器の大きさとの間に相関性を有することを提示したことは重要である。とりわけ、すでに先行研究で、その製作技術と器形の特異性が指摘されてきたオホーツク文化中期の刻文式土器が島外で製作された可能性や島内で製作されるものにおいても他の土器型式とは異なる土器製作技術によって製作されていたことを実証している。加えて、島内でも浜中2遺跡と香深井遺跡群との間で、この新たな土器製作技術の受容と継承に差が存在することを分析結果から明示したことは、オホーツク文化内部の集団交流や技術情報の伝達過程を理解する上で大きく貢献する研究成果であり、本研究の意義は大きい。

学位授与に関する委員会の所見

審査委員会では、本論文の多地域にまたがる資料を実際の資料観察と分析を通じて考察した独創性と新規性について高い評価がなされた。一方で、（１）技術選択を説明するために参照した学習理論の参照が不十分であること、（２）具体的な分析資料が礼文島という離島に限定されており、導かれた技術選択の過程が地域的な環境による結果なのか、オホーツク文化全体に適用可能かどうかに関し疑問点が残ること、などの不足点が指摘された。口頭試問においては、これらの指摘のいずれに対しても、学位申請者から応答及び補足説明があった。その他の疑問点についても、本論文の学術的価値を本質的に損なうものではないと、本委員会では判断した。

以上の審査の結果、審査委員会は全員一致して、学位申請者に博士（学術）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。